

社会的迷惑行為と向社会的行動における合意性推定^{1), 2)}

吉 武 久 美*・吉 田 俊 和*

Consensus Estimates on Social Inconsiderate Behavior and Prosocial Behavior

Kumi YOSHITAKE* and Toshikazu YOSHIDA*

The false consensus effect (FCE) refers to the tendency to overestimate consensus for one's own judgments and behaviors. Past studies (e.g., Ross et al., 1977) examined the FCE in ambiguous situations. However, the judgments and behaviors in the ambiguous situations cannot generally make social evaluation (negative-positive). This study examined whether participants produced the FCE for social inconsiderate behavior and prosocial behavior which received social evaluation. This study also investigated the relationship between the estimated consensus for social behavior and assumed-competence. Participants ($N=217$) completed a questionnaire consisting of social behavior and assumed-competence scale, and estimated the percentage of the consensus for social behavior. The results indicated that the participants overestimated the consensus for social behavior; thus, the false consensus phenomenon showed robustness. Moreover, the results revealed that the influence of the behavior tendency is strong on social inconsiderate behavior. These findings suggest that the participants justified themselves by predicting that the judgments and behaviors of others were similar to those of their own.

key words: false consensus effect, social inconsiderate behavior, prosocial behavior, assumed-competence

問題と目的

人は、自分の行動や判断が他の多くの人々と同じであり、共通している（合意が得られている）と考える傾向をもっている。たとえば、自分が好きなものを一般的に他の多くの人も好きであると考えがちである。我々は、多かれ少なかれ日常的に自分の判断や行動の合意性を推定していると考えられるが、このようなありふれた思い込みが負の方向へと働くこともある。たとえば、道端に座り込むような周囲

に迷惑な行為でも「みんなもする」と思い込むことで、迷惑なことであるという意識は低減し、また、イジメをしている人が周囲のみんなも同じ状況であれば自分と同じような行動をすると判断すれば、イジメをすることへの抵抗感が軽減されることになる。このような「自分の判断・行動は他者と共通している」と推定する現象を Ross, Green, & House (1977) は「False Consensus Effect（誤った合意性の効果）」として、実証的に検討を行っている。この研究において Ross et al. は、False Consensus

* 名古屋大学大学院教育発達科学研究科

Graduate School of Education and Human Development, Nagoya University

¹⁾ 本稿は、2009年度名古屋大学大学院に提出した修士論文の一部を加筆修正したものである。また、本研究の一部は、日本社会心理学会第50回大会・日本グループ・ダイナミックス学会第56回大会合同大会(2009)にて発表された。

²⁾ 調査実施および回答にご協力いただいた方々に感謝申し上げます。

Effect (以下, FCE と略す) を「ある状況での自分の行動選択と判断は一般的なことで適切なものとみなす反面, 他の選択反応を稀なことで不適切なものであるとみなす傾向」と定義した。そして, 選択した自分の行動や判断について, 多くの人が自分と同じ行動・判断を行うと過大に推定することを示した。具体的には, 実験参加者に研究のためサンドウィッチボードをつけて学内を歩き回るように依頼し, この依頼に同意する者と不同意の者の両者において, 自分と同じ行動・判断を多くの人が行うと過大に推定することを明らかにした。このとき問題となるのは, 実際の合意度ではなく, 自分の行動・判断は自分と異なる行動・判断を選択した者よりも多くの者に選択されるとみなすことである。FCE の先行研究には, 宇宙計画の是非についての国民投票という仮想場面における選択や実際にサンドウィッチボードをつけて学内を歩き回るかについての選択 (Ross et al., 1977), 夏休みの課題図書を選ぶ 10 冊の中から選択する (村田, 1986), 人事責任者役の学生が提示された二人の人物のどちらを採用するかを選択する (田村, 2005), 提示された状況に対しての二者択一 (e.g., ハムサラダと卵サラダのどちらを食べるか; Gilovich, Jennings, & Jennings, 1983), 8 つのバイアスの影響の受けやすさ (e.g., 成功と失敗の帰属; Pronin, Lin, & Ross, 2002) についての自分の判断に対する合意性を推定させたものがある。このように, 多くの研究において様々な自分の行動や判断に対する FCE が確認されている。

FCE 研究では, 今まで経験したことのない新奇な状況を想定させ, 合意性の推定を行わせているものが多かった。このため, 先行研究で扱われた行動・判断自体が評価しにくい, 正誤の判断のつけ難いあるいは判断する必要のない, あいまいなものとなりがちであった。また, 先行研究では, 合意性を推定する判断課題を社会的評価に基づく側面からの検討も行われていない。しかし, 日常的にはネガティブやポジティブといった社会的な評価を受けやすい行動・判断 (社会的行動) に対する合意性を推定する機会も多いと考えられる。そこで, 本研究では合意性推定の課題として, 日常的に行われ, 社会的な評価を受けやすい行動・判断を取り上げ, 誤った合意性が生じる過程を明らかにする。具体的には, ネガティブな社会的評価を受けやすい行動・判

断として社会的迷惑行為を, ポジティブな評価を受けやすい行動・判断として向社会的行動に対する合意性推定を検討する。

日常的な行動の中には犯罪とまでは言えないものの周囲の人に不快な思いをさせる行動が数多く存在する。繰り返される常習的な場面において, その行動や判断が社会的には非難されるような行動についても誤った合意性の推定が行われると考えられる。たとえば, 毎朝, 駐輪場所以外に駐輪をする人は多くの人も同じような場所に駐輪すると思っているし, ゴミのポイ捨てをする人は自分以外の多くの人もポイ捨てをすると思っていると考えられる。このような不特定多数の人に迷惑をかける行動は, ここ数年, その増加が市民生活に少なからず影響を与えており, 行動が日常的に繰り返され, 周囲の他者に不快感・悪影響を与えることが大きな社会問題となっている。実際, その防止のため, 東京都など多くの自治体で常習的迷惑行為に対して迷惑防止条例を改正したり, キャンペーンなどを実施したりして対策を講じているが, あまり改善されていないのが現状である (e.g., 東京都, 2004; 東京都, 2005)。これらの迷惑行為には, 落書き, 迷惑駐輪や駐車, 電車内での携帯電話の使用, ゴミのポイ捨て, 図書館の本への書き込みなど多くのものを取り上げられている。その中で, 社会的迷惑行為は「行為者が自己の欲求充足を第一に考えて, 他者に不快な感情を生起させる行為のこと」と定義され (斎藤, 1999), 多くの研究がなされている。社会的迷惑行為の認知と頻度との関連性に公的・私的自意識および社会・個人志向性が影響していることが明らかにされ (出口, 2004), 迷惑行為者と認知者の注目する規範の相違が迷惑行為を引き起こしている可能性が示唆され (高木・村田, 2005), 世間一般の迷惑認知推定と個人の迷惑認知にあまり差がないことが示されている (戸田・小林, 2007)。社会的迷惑行為に関する研究の中にも, FCE に類した周囲の他者の合意性推定を検討したものがある。石田・吉田・藤田・廣岡・斎藤・森・安藤・北折・元吉 (2000) は, 自分以外の多くの他者もその行為を迷惑だと認知する (であろう) という判断を「社会的合意性」と呼び, ある行為を迷惑だと判断する際に, 自分以外の他者がその行為をどのように認知しているのかを推定していることを明らかにしている。つまり, 「迷惑と感

じる人は自分以外の多くの人も迷惑だと感じている」と思っていることを示したのである。本研究では、迷惑行為のように日常的に繰り返されやすい行動は、自分も含むごく少数の迷惑行為の存在を目にすることで多くの人も迷惑行為を行っているとの誤った合意性推定を生じる可能性が考えられることから社会的迷惑行為を取り上げる。ただし、石田ら(2000)の研究で扱われた迷惑行為の認知に関する合意性推定(迷惑と感じるであろうことを推定する)ではなく、迷惑行為に関する合意性推定(迷惑行為を行うであろうことの推定)が見られるかどうかを検討する。

ここで、先行研究(Ross et al., 1977)において明らかにされたFCEの生じるメカニズムについて取り上げる。彼らは、FCEの生じるメカニズムとして、(1)自分の態度や行動の妥当性を保ちたいという自我防衛の動機づけ、(2)自分と類似した判断を行う人々との選択的接触、および結果的にその行動が最も思い出されやすいという利用可能性、(3)状況のあいまいさの解消、という3つを挙げている。彼らの研究では、サンドウィッチボードを着用し、キャンパスを歩くことの諾否に対するFCEが検討されている。彼らの主張によれば、実験参加者にとっては、ボードの着用を応諾した場合にはその姿を知人に見られること、また、拒否した場合には実験者を落胆させることが自我に脅威を与える状況となる。そして、このような状況の解消・低減のために、自我防衛の動機づけによるFCEが生じるとされている。つまり、知人にボードを着用した姿を見られることの恥ずかしさや実験者を落胆させることへの罪悪感は、実験参加者にとって自我の危機的状況として捉えられており、このことが自分と同じ行動をする人を過大に推定させていると考えられる。その一方で、Ross(1977)はFCEの生じるメカニズムとして、事前に発表した自身の研究(Ross et al., 1977)で主張された3つのメカニズムの中でも、自我防衛の動機づけよりも利用可能性やあいまいさの解消に注目している。その理由として、彼らが設定したサンドウィッチボードの着用依頼状況では、実験参加者にとって、自我を防衛すべき脅威が生じる危機的状況とは言いがたいためだと考えられる。また、村田(1986)は、「自分の判断・行動が最も効率的に利用できる情報となるため、同じ状況の一般他

者は自分と同じ判断・行動を行うと推定しやすい」と指摘し、FCEの生じるメカニズムを自己の判断・行動の利用可能性に求めている。このように、多くの先行研究はFCEの生じるメカニズムとして、利用可能性やあいまいさの解消を強調している。しかし、新奇な場面における合意性推定の先行研究であるSherman, Presson, & Chassin(1984)は、自分の選択した行動が失敗であるとフィードバックを受けた場合、つまり、選択の失敗という脅威にさらされた場合には自分の行動を正当化し、自分の行動を社会的に支援するように動機づけられ、FCEを示すことを指摘している。さらに、Sherman, Presson, Chassin, Corty, & Olshavesky(1983)は、未成年者と成人の喫煙行動の合意性推定において、未成年者のみがFCEを示すことを明らかにした。すなわち、未成年者の喫煙行動のように社会的に望ましくないネガティブな行動では、喫煙する未成年者は自分の行動の正当化に動機づけられ、他者も喫煙すると過大に推定したのである。これらのことから、社会的行動の中でもネガティブな行動である社会的迷惑行為を行いやすい者は、社会的に望ましくない行動を行うことで他者の自分に対する評価が悪くなることを自分への脅威と捉え、自分の行動を正当化するために、行いにくい者に比べて、他者も自分と同じように迷惑行為を行うと過大に推定すると考えられる。

次に、社会的にポジティブな評価を受ける向社会的行動の中でも、日常的に繰り返されると考えられる行動を選んで取り上げる。向社会的行動とは「外的な報酬を期待することなしに、他人や他の人々の集団を助けようとしたり、こうした人々のためになることをしようとする行為」と定義されている(Mussen & Eisenberg, 1977)。この「他者のためになることを意図する」向社会的行動と「行為者が自己の欲求充足を第一に考える」社会的迷惑行為は対照的な行動ともいえる。社会的迷惑行為とは異なり、向社会的行動は社会的に承認されたポジティブな行動と捉えられる。そのため、向社会的行動を行いやすい者が合意性の推定を行った場合、自分と同じようにポジティブな行動を行いやすい者を多く推定するものの、自分の行動を正当化する必要がないため、迷惑行為を行いやすい者のように強くFCEを生じさせることはないと考えられる。一方、向社

会的行動を行わない者は、自分の判断を正当化することで社会的な行動をしないという負い目を解消するよう動機づけられ、社会的迷惑行為と同じようにFCEを強く生じさせると考えられる。つまり、向社会的行動を行わない者は、向社会的行動を行いやすい者に比べ、自分の行動に対する合意性を多く推定すると考えられる。以上のことから、本研究の目的は社会的迷惑行為や向社会的行動のような日常的行動においては、Ross et al. (1977) が指摘した自我防衛的動機づけに基づく、誤った合意性の推定が行われやすいことを実証することである。

上記の議論とは別に、若者世代の特徴として他者軽視や他者蔑視を通して、根拠のない有能感を高める傾向の強さが指摘され、仮想的有能感という概念が提案されている(速水・木野・高木, 2003)。仮想的有能感とは、「自己の直接的なポジティブ経験に関係なく、他者の能力を批判的に評価、軽視する傾向に付随して習慣的に生じる有能さの感覚」と定義されている。仮想的有能感は自尊感情とは異なる概念で、自尊感情の高低と仮想的有能感の高低の組み合わせによる類型化が行われている(速水・木野・高木, 2004)。仮想的有能感の特徴である「他者を軽視すること」は「社会規範を軽視すること」いわば「社会を軽視すること」であることから、仮想的有能感は社会的迷惑行為と関連があることも指摘されている(速水, 2006)。また、「一種の防衛機制として、他者を軽視することで自信を取り戻そうとしている」とも指摘されていることから、他者を軽視する傾向である仮想的有能感は、自分の行動・判断の合意性を推定する際にその行動・判断が社会的に望ましいものであるか、望ましくないものであるのかによって合意性の推定に影響を与えることが考えられる。そこで、本研究では個人差変数として仮想的有能感を取り上げる。仮想的有能感の特徴は単に他者を見下すだけでなく、一種の防衛機制的働きも指摘されていることから、社会的な評価を受けやすい行動(社会的行動)に対しては、仮想的有能感の高低が合意性の推定に影響を与えることが考えられる。具体的には、Figure 1 に示すような影響過程が考えられる。まず、仮想的有能感は社会的迷惑行為といったネガティブな評価を受けやすい行動の行動傾向および社会的迷惑行為をする人の割合推定(以後、「迷惑推定」とする)に正の影響を与え、一

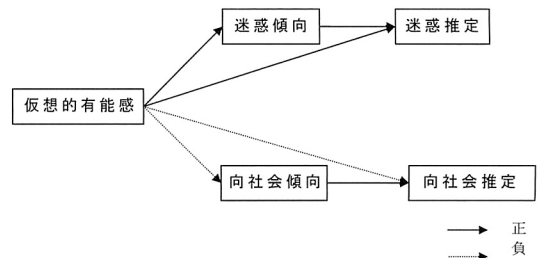


Figure 1 仮想的有能感が合意性推定および行動傾向へ及ぼす影響過程 (N=205)

方向社会的行動といったポジティブな評価を受けやすい行動の行動傾向および向社会的行動をする人の割合推定(以後、「向社会的推定」とする)には負の影響を与えると考えられる。次に、社会的迷惑行為を行いやすい行動傾向は迷惑推定に、向社会的行動を行いやすい行動傾向は向社会的推定に正の影響を与えると考えられる。以上のことから、4つの仮説を検討する。

仮説1: 社会的評価を受けやすい行動・判断(社会的迷惑行為や向社会的行動)においても、あいまいで新奇な状況における行動・判断と同じように合意性が過大に推定される。

仮説2: 社会的行動の中でも、ネガティブな評価を受けやすい社会的迷惑行為の方が、ポジティブな評価を受けやすい向社会的行動に比べ、合意性が多く推定される。

仮説3-1: 仮想的有能感は迷惑推定に正(多く)の、向社会的推定に負(少なく)の影響を与える。

仮説3-2: 仮想的有能感は社会的迷惑行為に正の、向社会的行動に負の影響を与え、間接的に他者が行う社会的迷惑行為に正(多く)の、向社会的行動に負(少なく)の影響を与える。

方 法

調査協力者 調査協力者は、A県内の複数大学の1~4年生217名(男性121名、女性94名、不明2名)。平均年齢は、20.1歳($SD=2.75$)であった。

質問紙の構成

1) 行動判断: 自己の行動経験を問う項目として、以下の36項目を利用した(Table 1)。社会的迷惑行為として、吉田ら(1999)で使用された迷惑行為の一部に若干の修正を加えたものと日常繰り返される迷惑行為を追加した計15項目。向社会的行動

として、菊池 (1998) の向社会的行動尺度大学生版の一部に若干の修正を加えたものと、より一般的な向社会的行動を追加した計 12 項目。上記、各項目の行為について「することがある」「することはない」の 2 件法で回答するように求めた。さらに、FCE が Ross et al. (1977) の設定した新奇であまいな状況においても生じていることを確認するため、統制項目として、Ross et al. (1977) で利用された正誤のあいまいな行動・判断 (e.g., 10 年以内に女性の首相が誕生する) や、自己の選択した行動に明白な正答のない行動・判断 (e.g., 死について考える) を作成した。これら計 9 項目に対しても「思う」「思わない」「考える」「考えない」といった 2 件法で回答を求めた。

2) 行動判断の合意性推定: 1) の各項目について、「一般的に、他の人は自分と同じ判断・行動をしますか」との教示のもと、その割合を 0~100% の範囲で回答を求めた。同時に、回答の合理性を確認するために、自分と異なる判断・行動する人の割合も 0~100% の範囲で回答し、両推定の和が 100% とするように求めた。

3) 仮想的有能感尺度: Hayamizu et al. (2004) で作成された仮想的有能感尺度, 11 項目 (e.g., 「話し合いの場で、無意味な発言をする人が多い」「世の中には、常識のない人が多すぎる」) を使用し、5 件法で回答を求めた。

結 果

分析には回答に不備のなかった 205 名 (男性 111 名, 女性 92 名) を用いた。さらに、6 項目については、参加者の行動判断選択が「することがある」「することはない」のどちらか一方に 90% 以上の高い割合で偏ったため、以下の分析から除外した。

仮説ごとの結果を以下に示す。

仮説 1 の検証

Ross et al. (1977) の分析方法に従って、項目ごとに、社会的行動を行う者と行わない者による当該行動を「する人の割合」推定について t 検定を行った。分析対象となった 30 項目中 26 項目で FCE の生じていることが明らかとなった (Table 1)。これにより、社会的迷惑行為や向社会的行動といった社会的行動においても、合意性を過大に推定していることが明らかとなった。つまり、先行研究と同様に FCE

が生じていることが示された。

次に、社会的迷惑行為もしくは向社会的行動のどちらかに弁別力の高い項目を抽出するため、分析に使用した 30 項目中 22 項目 (Ross et al. (1977) をもとに作成した 8 項目は、統制項目群として使用した項目で、明白な正答がなく、社会的評価に適さない項目であるため除外した) に対し、多重コレスポネンス分析を実施した (Figure 2)。コレスポネンス分析の結果から社会的迷惑行為として弁別力の高い 6 項目 ($\alpha=.78$) と向社会的行動として弁別力の高い 7 項目 ($\alpha=.81$) を選び、これらの項目群に対しても合意性を過大に推定しているかを明らかにするための分析を行った。

社会的迷惑行為 6 項目の中でその行為を「することがある」を選択する率の高い者を社会的迷惑行為の「高傾向者」、低い者を「低傾向者」とし ($M=3.8$ で高低に群分け)、同様に、向社会的行動についても 7 項目中でその行動を「することがある」の選択率の高い者を向社会的行動の「高傾向者」、低い者を「低傾向者」とした ($M=4.3$ で高低に群分け)。これら行動傾向別による合意性推定の平均値と標準偏差を Table 2 に示す。迷惑行為の高傾向者と低傾向者が推定する迷惑推定の t 検定、および向社会的行動の高傾向者と低傾向者が推定する向社会推定の t 検定をそれぞれ行ったところ、高傾向者の方が低傾向者よりも割合を有意に高く推定していた ($t(203)=9.21, p<.001, t(203)=4.99, p<.001$)。このことから、社会的評価を受けやすい社会的行動 (社会的迷惑行為と向社会的行動) においても、合意性を過大に推定していることが明らかとなった。つまり、FCE は個別項目ごとだけでなく行動傾向群においても生じていることが明らかとなった。以上のことから、仮説 1 は支持されたと考えられる。

仮説 2 の検証

仮説 2 を検証する際、社会的迷惑行為の高傾向者が見積もる迷惑推定と向社会的行動の高傾向者が見積もる向社会推定は、母集団が異なるため直接比較することはできない。そこで、ネガティブもしくはポジティブな行動の行動傾向が合意性推定に与える影響の強弱を検討することで間接的にはあるが仮説 2 の検証を試みた。社会的迷惑行為と向社会的行動それぞれの行動傾向が迷惑推定と向社会推定に与える影響の強さを検討するため、共分散構造分析を

Table 1 行う者・行わない者の判断課題に対する合意性推定の割合と標準偏差および t 検定の結果

		する人推定		t 値
		行う者	行わない者	
社会的迷惑行為	1 ゴミのポイ捨てをする	63.13 (24.65) 39	37.13 (17.90) 166	6.21***
	2 赤信号のときに横断歩道を渡る	63.08 (20.87) 155	37.74 (20.53) 50	7.49***
	3 授業中、授業とは関係のないことを友だちとしゃべる	72.30 (20.07) 151	47.09 (18.71) 54	8.06***
	4 メールやゲームをしながら横断歩道を渡る	66.33 (19.44) 126	44.58 (21.99) 79	7.20***
	5 歩道を自転車で走行する	86.25 (13.63) 183	57.05 (25.06) 22	5.37***
	6 駅やお店付近で、指定された場所以外に自転車やバイクを止める	64.49 (17.86) 130	41.15 (18.14) 75	8.96***
	図書館で借りた本を貸出期限を過ぎても返さない	44.17 (19.78) 64	24.23 (17.45) 141	7.27***
	電車やバスなどの車内で、友だち同士大きな声でおしゃべりをする	59.31 (18.31) 102	40.46 (15.14) 103	8.04***
	ごみ収集日以外にゴミを出す	48.71 (19.80) 21	27.94 (17.92) 184	4.98***
	音楽や映画などを不正にコピーしたり、ダウンロードしたりする	67.42 (21.40) 118	45.59 (23.46) 87	6.93 ***
	電車の中やレストランなどで、携帯電話で話をする	54.44 (21.00) 63	35.87 (17.66) 142	6.55***
	他人の自転車を倒したときに、倒したままにしておく	54.25 (15.16) 44	38.65 (16.59) 161	5.63***
向社会的行動	7 子どもを乗せている自転車が前から来たら、道を譲る	64.05 (16.00) 161	42.30 (17.68) 44	7.81***
	8 ボランティアに参加する	40.43 (15.49) 61	39.81 (17.63) 144	0.24
	9 環境のことを考えて、エコバッグを利用する	63.47 (17.28) 133	48.90 (15.87) 72	5.92***
	10 知らない人でも困っている人がいると助ける	48.58 (19.02) 120	40.13 (18.62) 85	3.16**
	11 後ろに並んでいる人が急いでいたときに順番を譲る	50.95 (19.86) 98	35.68 (18.29) 107	5.73***
	12 おつりが多かったときに、それを伝える	58.54 (21.42) 127	34.82 (20.46) 78	7.83***
	13 見知らぬ人が物を落としたとき、教えてあげる	65.97 (16.91) 182	51.35 (15.03) 23	3.95***
	ゴミの分別をする	69.80 (16.79) 183	55.55 (19.29) 22	3.70***
	バスや電車内で立っていることが危険だと思える人に席を譲る	50.24 (18.66) 164	46.32 (23.00) 41	1.15
	体調が良いときは、献血に協力する	30.92 (19.07) 26	35.17 (19.50) 179	1.04
統制項目	死について考える	72.99 (22.66) 181	49.75 (21.76) 24	4.74***
	2030 年までに地球外生命が発見されると思う	51.35 (20.63) 55	36.73 (18.87) 150	4.79***
	大勢でいるよりも、一人でいる方が好きだ	43.75 (17.34) 108	41.66 (13.94) 97	0.96
	10 年以内に女性の首相が誕生する	57.52 (16.04) 89	36.40 (16.98) 116	9.04***
	石油が枯渇する前に、代わりとなるエネルギーが開発される	63.50 (15.87) 166	42.87 (16.98) 69	7.21***
	犬と猫、どちらが好きですか	57.06 (9.53) 120	54.22 (10.07) 85	2.05*
	老後に、年金をもらえらると思う	59.12 (18.89) 144	40.13 (17.26) 61	6.75***
	自分の健康について心配する	78.64 (14.88) 176	64.24 (19.88) 29	3.73***

注 1) 上段: 平均値, () 内は標準偏差, 下段: N 注 2) *** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$

注 3) 番号のある項目を弁別力の高い項目として、後の分析に利用した。

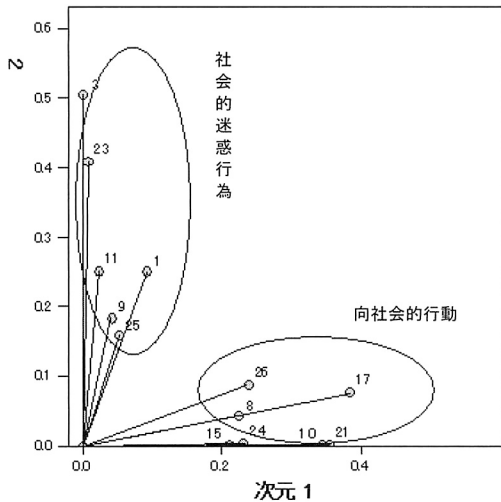


Figure 2 多重コレスポネンダンス分析の判別測定

Table 2 行動傾向別、迷惑推定と向社会推定の平均値

		迷惑推定	向社会推定
社会的迷惑行為	高傾向	65.16	51.52
	N=134	(9.73)	(9.01)
	低傾向	51.11	51.23
向社会的行動	高傾向	59.94	54.94
	N=95	(11.54)	(9.14)
	低傾向	60.66	48.38
	N=110	(13.02)	(9.58)

注意) 上段: 平均値 下段: 標準偏差

行った。Amos 7.0 for Windows を使用し、Figure 3 のモデルに従って分析を実施した。結果、迷惑傾向から向社会推定、向社会傾向から迷惑推定のパスが有意ではないため、モデルからこれらのパスを削除し、モデルの再検討を行った。Figure 4 に示す最適モデルが得られた。モデルの適合度指標は、 $\chi^2(2) = .960(p = .61)$, GFI=.998, AGFI=.988, CFI=1.000, RMSEA=.000 であり、十分な適合度が示された。迷惑傾向から迷惑推定への直接効果は $\beta = .58$ 、一方、向社会傾向から向社会推定への直接効果は $\beta = .42$ であった。以上のことから、迷惑傾向が迷惑推定へ与える影響は向社会傾向が向社会推定に与える影響よりも強いことが示された。従って、仮説 2 は概ね支持されたと考えられる。

仮説 3-1, 3-2 の検証

まず、仮想的有能感 11 項目について因子分析

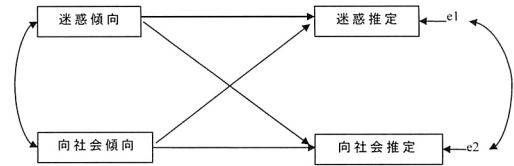
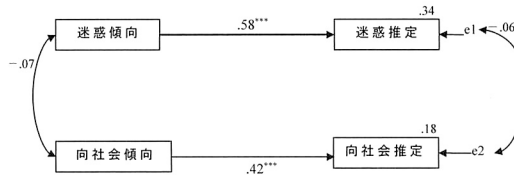
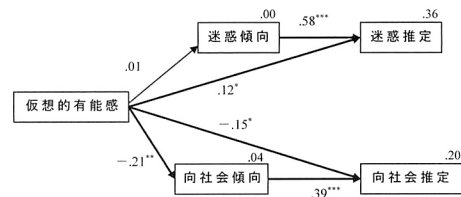


Figure 3 行動傾向が合意性推定に及ぼす影響過程



注1) *** $p < .001$
注2) 変数、右上の数字は決定係数

Figure 4 合意性推定に及ぼす影響過程 (N=205)



注1) * $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$
注2) 変数、右上の数字は決定係数

Figure 5 合意性推定および行動傾向へ及ぼす影響過程 (N=205)

(主因子法)を行った。固有値の推移(3.52, 1.46, 1.01, 0.90...)と解釈可能性から先行研究同様に一因子として扱うこととする($\alpha = .78$)。次に、迷惑推定と向社会推定に対して、仮想的有能感が与える影響を検討するため共分散構造分析を行った。Figure 1 に示す仮説モデルに従って分析を行った結果、Figure 5 に示す最適モデルが得られた。モデルの適合度指標は、 $\chi^2(2) = .324(p = .85)$, GFI=.999, AGFI=.995, CFI=1.000, RMSEA=.000 であり、十分な適合度が示された。なお、Figure 5 は煩雑さを避けるために誤差変数を表記していない。仮想的有能感は社会的迷惑行為傾向に正の影響を与えていると考えたが、パス係数は $\beta = -.00(p = .94)$ で有意ではなかった。しかし、他のパスについては全て有意であり、かつ、その正負は予測どおりで、仮想的有能感は迷惑推定に正、向社会的行動傾向および向社会推定には負の影響を与え、社会的迷惑行為および向社

会的行動の行動傾向はそれぞれ迷惑推定・向社会推定に正の影響を与えていることが明らかとなった。以上のことから、仮説 3-1 は支持され、仮説 3-2 は一部支持されたと考えられる。

考 察

本研究では、社会的な評価を受けやすい行動である社会的迷惑行為や向社会的行動（社会的行動）に対しても FCE が生じていることを確認し、さらに、その発生メカニズムとして、あいまいな状況の解消や自己判断の利用可能性だけでなく、自我防衛的動機づけによる正当化の存在を明らかにするとともに、仮想的有能感の合意性推定への影響について検討した。

先行研究同様に、社会的行動（Tabel 1 の社会的迷惑行為と向社会的行動）についても FCE の生じていることが明らかとなった。このことは、FCE の頑健さを確認するとともに、新奇であいまいな状況だけでなく、日常的に繰り返される社会的行動に対しても FCE が生じることを示している。さらに、社会的迷惑行為と向社会的行動の高傾向者・低傾向者では、高傾向者のほうが低傾向者に比べ、自分と同じようにその行動をする人を多く推定していた。したがって、仮説 1 は支持されたと考えられる。行動傾向の影響は、社会的迷惑行為と向社会的行動の両方で同様に見られ、当該行動を行いやすい傾向の高い者は低い者に比べ、自分と同じ行動をする人を多く推定していた。迷惑行為にしても向社会的行動にしても、その行動を行いやすい傾向の者は、自分がよく行う行動と同じ行動を他者も行っていると推測される。

次に、社会的迷惑行為と向社会的行動それぞれの行動傾向が迷惑推定と向社会推定に及ぼす影響を検討した。社会的迷惑行為傾向は迷惑推定に、向社会的行動傾向が向社会推定に影響していることが示された。迷惑傾向が迷惑推定へ及ぼす影響 ($\beta=.58$) は向社会傾向が向社会推定へ及ぼす影響 ($\beta=.42$) よりも強く、決定係数も .34 と .18 で迷惑傾向から迷惑推定への説明率の方が高かった。つまり、迷惑行為をする傾向の高い者は迷惑推定を、向社会的行動をする傾向の高い者は向社会推定を過大に推定しているが、行動傾向が合意性推定に及ぼす影響力については社会的迷惑傾向の方がより強いことが示され

たといえる。これにより、仮説 2 を支持する証左が示唆された。すなわち、迷惑行為の高傾向者は、ネガティブな行為を行っていることに対する正当化への動機づけが高いため、社会的迷惑行為においてより影響力が強かったと推測される。合意性を過大に推定することは、自分を多数派であると認知していることだと言い換えることができる。Illusory Correlation（錯誤相関）の研究において、多数派（大集団）を優れた集団、少数派（小集団）を劣った集団と認知する判断傾向（白井, 1979）や集団サイズと集団の好ましさと関連（杉森, 1993; 1995）が示されている。それゆえ、多数派であることが、自分の判断行動を正当化する裏付になると考えられる。要するに、迷惑行為を行いやすい傾向の者は、自分の行動・判断と同じ他者を多く推定し、自分を多数派であると思うことで自分の行動・判断の正当化を行っていると考えられる。本研究では、仮説 1 で FCE が生じていることが明らかとなり、さらに仮説 2 において社会的にネガティブな評価を受けやすい迷惑行為について行動傾向の影響が強く示されたことから、FCE の生じるメカニズムとして自己判断の利用可能性だけでなく、自我防衛的動機づけによる正当化も影響を与えていることが示唆された。

最後に、社会的行動に対する仮想的有能感の影響は、社会的迷惑行為と向社会的行動で異なることが明らかとなった。迷惑推定については仮想的有能感から直接正の影響が示され、向社会推定については直接効果として負の影響が、間接効果として向社会傾向を経由しても示された。これらの結果から、仮説 3-1 は支持され、仮説 3-2 は部分的に支持されたと考えられる。すこし飛躍した言い方をすれば、仮想的有能感の高い者は、向社会的行動のようにポジティブな評価を受けやすい行動をする人は少数であり、多くの人はそのような行動は行わないと推定することで他者を見下し、自己の保全を図っていると考えられる。しかし、社会的迷惑行為については仮想的有能感からの直接的影響は認められたが、仮想的有能感と迷惑傾向の関連は見出されなかった。これは、社会的迷惑行為といったネガティブな行動を行うことのインパクトの強さを示している。つまり、仮想的有能感の高低に関わらず、迷惑行為を行いやすい傾向の者は自分のネガティブな行動・判断

の正当化や迷惑行為のインパクトの強さから、社会的迷惑行為をする人を多く推定することが考えられる。

本研究では、社会的評価がネガティブな行動の誤った合意性推定の発生メカニズムとして、あいまいな状況の解消や自己の判断の利用可能性だけでなく、自我防衛の動機づけによる正当化の存在を明らかにすることを目的としていた。しかしながら、調査協力者に合意性推定の根拠を問う設問を何ら設けていなかった。そのため、合意性を過大に推定していることが自分の判断や行動を正当化したことによるのかは正確に特定することはできない。結果として、その可能性を示唆したに過ぎず、今後の検討課題である。また、実際の割合との乖離が小さい合意性推定を「誤り」として捉えることに対する問題点が指摘されている (Krueger & Zeiger, 1993) が、本研究では実際の割合との検討はできなかった。しかし、本研究で扱った社会的評価を受けやすい判断・行動においても、実際の割合との乖離がネガティブな行動を助長し、さらには偏見や内集団ひいきへとつながる可能性も考えられる。たとえば、後部座席のシートベルト着用率や交通ルール・マナーに対する意識の低い人の合意性推定には実際の着用率との乖離が生じ、そのことが交通ルールに対する意識に影響を与えていることも考えられる。このため、今後、実際にその判断・行動に同意する者の割合（実際の判断・行動率）が統計資料として存在する場合に、その実際の数値と合意性推定値の乖離についても検討する必要がある。

引用文献

- 出口拓彦 2004 社会的迷惑行為に対する認知と頻度の関連—公的・私的自意識および社会・個人志向性に着目して—藤女子大学紀要, **42**, 59-64.
- Gilovich, T., Jennings, D. L., & Jennings, S. 1983 Causal focus and estimates of consensus: An examination of the false-consensus effect. *Journal of Personality and Social Psychology*, **45**(3), 550-559.
- 速水敏彦 2006 他人を見下す若者たち 講談社現代新書.
- 速水敏彦・木野和代・高木邦子 2004 仮想的有能感の構成概念妥当性の検討 名古屋大学教育学部紀要, **51**, 1-7.
- Hayamizu, Y., Kino, K., Takagi, K., & Tan, H. 2004 Assumed-competence based on undervaluing others as a determination of emotions: Focusing on anger and sadness. *Asia Pacific Education Review*, **5**, 127-135.
- 石田靖彦・吉田俊和・藤田達雄・廣岡秀一・斎藤和志・森 久美子・安藤直樹・北折充隆・元吉忠寛 2000 社会的迷惑に関する研究 (2) 名古屋大学教育学部紀要, **47**, 25-33.
- 菊池章夫 1998 思いやりを科学する—一向社会的行動の心理とスキル 川島書店.
- Krueger, & Zeiger. 1993 Social Categorization and the Truly False Consensus Effect *Journal of Personality and Social Psychology*, **65**(4), 670-680.
- 村田光二 1986 False Consensus 効果について 社会心理学評論, **5**, 71-84.
- マッセン, P. & アイゼンバーグ=N=バーク, N. 菊池章夫 (監訳) 1980 思いやりの発達心理 金子書房 (Mussen, P. & Eisenberg Berg, N. 1977 *Roots of caring, sharing and helping: The development of prosocial behavior in children*. Cambridge University Press.)
- Pronin, E., Lin, D., & Ross, L. 2002 The Bias Blind Spot: Perceptions of Bias in Self Versus Others. *Personality and Social Psychology Bulletin*, **28**, 369-381.
- Ross, L. 1977 The intuitive psychologist and his shortcomings: Distortions in the attribution process. *Advances in experimental social psychology*, **10**, 173-220.
- Ross, L., Greene, D., & House, P. 1977 The false consensus effect: An egocentric bias in social perception and attribution processes. *Journal of Experimental Social Psychology*, **13**, 279-301.
- 斎藤和志 1999 社会的迷惑行為と社会を考慮すること 愛知淑徳大学論集, **24**, 67-77.
- Sherman, S., Presson, C., Chassin, L., Corty E. & Olshavesky R. 1983 The False Consensus Effect in Estimates of Smoking Prevalence Underlying Mechanisms. *Personality and Social Psychology Bulletin*, **9**(2), 197-207.
- Sherman, S., Presson, C. & Chassin, L. 1984 Mechanisms Underlying the False Consensus Effect: The Special Role of Threats to the Self. *Personality and Social Psychology Bulletin*, **10**(1), 127-138.
- 白井泰子 1979 ステレオタイプの判断の認知的基礎—誤った関連づけの認知— 実験社会心理学研究, **19**, 61-69.
- 杉森伸吉 1993 集団サイズと集団誘意性の顕著性の交

- 相互作用 心理学研究, **64**, 16-24.
- 杉森伸吉 1995 母集団サイズと集団誘意性の間の幻相
関認知に関する実験的研究 社会心理学研究, **11**,
39-50.
- 高木 彩・村田光二 2005 注目する規範の相違による
社会的迷惑 社会心理学研究, **20**, 216-223.
- 田村美恵 2005 他者判断と所属集団サイズが合意性推
定に及ぼす影響 実験社会心理学研究, **45**, 1-12.
- 戸田まり・小林亜希子 2007 大学生の社会的迷惑に関
する検討 北海道教育大学紀要, **57**, 32-40.
- 東京都 2005 報道発表資料 2005 年 9 月掲載 東京都
2005 年 〈<http://www.metro.tokyo.jp/INET/OSHIRASE/2005/09/20f9r800.htm>〉(2008 年
12 月 10 日)
- 東京都 2004 衆に著しく迷惑をかける暴力的不良行為
等の防止に関する条例改正 東京都 2004 年
〈http://www.reiki.metro.tokyo.jp/reiki_honbun/ag10122121.html〉(2008 年 12 月 10 日)
- 吉田俊和・安藤直樹・元吉忠寛・藤田達雄・廣岡秀
一・斎藤和志・森 久美子・石田靖彦・北折充隆
1999 社会的迷惑に関する研究(1) 名古屋大学教
育学部紀要, **46**, 53-73.
- 吉田俊和・元吉忠寛・北折充隆 2000 社会的迷惑に関
する研究(3)—社会考慮と信頼感による人の分類と
迷惑行為との関連— 名古屋大学教育学部紀要,
47, 35-45.

(受稿: 2009.9.25; 受理: 2010.12.15)
